

# ICTで拓がる「With コロナにおける国際交流とボーダレスな協働的学び」

日本福祉大学付属高等学校 教諭 君塚 磨

キーワード：ICT, 国際交流, Zoom, 探究活動, 国際協働, SDGs

## 実践の概要

With コロナ時代において、直接的な対面・訪問が困難な状況下、現在普及しつつあるインターネット会議システム Zoom を活用し「ICT をプラットフォームにした国際交流」および、国境を越えた生徒グループによる「ボーダレスな協働学習・探究活動」に取り組んだ。

### 1. 目的・目標

ICT の発達に伴い、国と国との距離は縮まり、今や、ほとんどの人が所持しているスマートフォン等の端末を利用して、いつでも、どこでも簡単に情報を共有し、コミュニケーションがとれる。また、コロナの影響下、インターネット会議システムが急速に普及し、国内外共に使用する機会が増えている。これら ICT の状況は、国際交流の視点から考えれば、恵まれた環境であるにもかかわらず、ICT をプラットフォームにした国際交流の教育実践に関する報告は多くない。しかしながら、コロナの影響下、学校訪問・対面による活動の見通しが難しいなか、すべてを ICT のみで完結させる「ICT をプラットフォームにした国際交流」の実践・経験を積むことは、今後予想される状況から考えても大切である。そのため、With コロナ時代における国際交流の展開の在り方を追求し、多くの学校で活用されている Google Workspace、普及しつつあるインターネット会議システム Zoom を効果的に活用し、国際プレゼンテーション大会 World Youth Meeting での協働発表を目標に、ICT・国際協働学習に取り組んだ。この活動を通じて、ICT を上手く活用することで、直接的な対面無しでも十分に国際交流が可能であることを生徒に体験させると共に（写真 1）、Diversity（多様性）を両国生徒が身に付け、磨いていく機会になればと考え実施した。



写真 1 ICT を通じた国際交流の様子

### 2. 実践内容

#### 2.1 国際協働学習に向けたチームビルディングの形成と SNS (LINE) の活用

国際交流・協働学習において、生徒・教師ともにどうチームビルディングをしていくかが大切である。これについては（コロナの影響下においては）昨年に引き続き、

今年も課題であった。今年度については、インターネット会議システム Zoom を活用して、自己紹介・文化を紹介するプレゼンテーションを各生徒に英語で取り寄せた（写真 2）。日本の教育現場においては、SNS の活用



写真 2 Zoom を通じたプレゼンテーション

について賛否両論あるが、国によっては SNS が公式的な連絡ツールとして積極的に活用されている状況もある。想定外であったが、相手校からのアプローチをきっかけにはじまった「SNS (LINE) を通じた生徒同士の日常的なやりとり」が、チームビルディングに効果的であった（写真 3）。ICT を軸とした「議論の深めやすい関係や環境を作る」ことを目的に、生徒にとって身近な SNS を一手段として、生徒同士のコミュニケーションの活性化を図ることは有効である。



写真 3 国外生徒からの SNS の活用・招待の様子

#### 2.2 Google フォームを活用した調査活動と調査結果を活用する異文化体験

交流校のあるフィリピンではリサイクル工場が少ない点から、SDGs #12（つくる責任つかう責任）に着目し、生徒にとって身近である「紙」をテーマに設定し、Google フォームを使い、「紙とノートに関する意識・使用実態」というアンケート調査を、両校生徒を対象に行った。アンケートを実施したことで、両国の意識の違いが極めて顕著であることがわかった（図 1）。国際交流では、文化、環境、意識等の違いを、いかにして体験するかが醍醐味

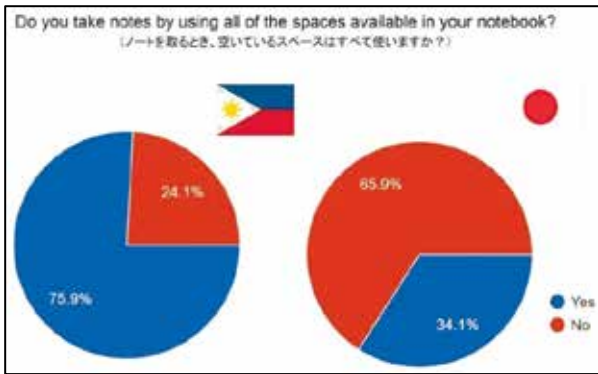


図1 Google フォームで実施したアンケート結果抜粋

のひとつである。今日のように、直接的な訪問・対面が難しい状況下では、「アンケートを活用することで異文化体験をさせる」ことも有効な手段である。

### 2.3 英語プレゼン発表に向けたスピーチトレーニング

ICTのみしか使用できない状況のなかでも、ICTの利点の1つであるZoomのブレイクアウトルーム等を活用し、両校の生徒同士によるマンツーマンのスピーチトレーニングを行った。日本の生徒はオールイングリッシュという環境下でトレーニングを受けなければならず、ややハードルの高い取り組みではあった。しかしながら、生徒がお互いの状況を理解しあい、教える側(国外生徒)は『わかりやすい(英語)表現』でのコメントを心がけ、教わる側(国内生徒)は自分の困っている点を慣れない英語を活用し『どう的確に伝えるか』努力することで、シンプルなスピーチトレーニングを通して、協働的な深い学びに自然な形でつながっていった(写真4)。この活動があったことで、国際プレゼンテーション大会において、「リスナーにわかりやすい英語プレゼンテーション」をすることができた。



写真4 Zoomによる生徒同士のスピーチトレーニング

### 3. 成果

コロナの影響下、直接的な対面・訪問無しに、どのようにして国際交流を展開したり、異文化理解を体験させたりして、協働的な学びにつなげ、Diversityを生徒に身に付けさせるかが課題であった。事後の生徒アンケート・

感想文によれば、今回の取り組みは、国境、環境、カルチャー、学校の垣根を越えたボーダレスな学びの空間を実現し、SDGsを柱とした私たちを取り巻く様々な問題の共有を通じて、「Diversityを理解し高めることが出来た」という主旨が述べられており、概ね目標の達成に至ることができたと考える。また、国際プレゼンテーション大会で提案したSDGs達成に向けたアクションプラン「リサイクル紙で作成するRe-New notebook」を国際協働の一步として展開するに至った。提携校である「フィリピン日系人会国際学校(Philippine Nikkei Jin Kai International School)」では、本教育実践に参加した生徒が中心となり現地生徒に向けてSDGsオリエンテーションを実施し、SDGsについて紹介するとともに、アクションプラン「Re-New notebook」の協力を呼び掛けた。また、本校生徒は、「Re-New notebook」の表紙を飾るための日本文化「折り紙」の折り方を教えるための動画を作成した。両校生徒の取り組みで作成した「Re-New notebook」の実物が写真5である。アクションプラン「Re-New notebook」の取り組みについては、11月に、日本・



写真5 実際に出来上がった「Re-New notebook」

フィリピン・台湾・カンボジアの生徒・学生・教員を招待し、本校主催でオンライン開催した「Global Meetup 2021」において活動報告を行った。このような「ICTをプラットフォームにした国際交流」に取り組むことで、両校生徒ともにボーダレスに絆を深め、継続性のある国際交流、国際協働のきっかけや普及につながったと考える。

### 4. 今後に向けて

With コロナをきっかけにチャレンジした「ICTをプラットフォームにした国際交流」は、多方面に波及効果を与え、「新しい形の国際交流」の可能性を示した。「直接的対面」と「ICT・オンライン」のそれぞれが持つメリットを生かしながら、「ブレンド型の国際交流」という新しい形態での実践を、年間を通した取り組みとして展開、追求したい。そして、「グローバルな社会貢献のできる人材の育成」に努めていきたい。